

第四章 多様な世界観

古今東西、人類の歴史においては幾つもの異なる世界観が乱立し、互いに自身の正当性を主張し合ってきた。本書で提示する統合場のモデルは、それら多様な世界観を整理して理解するのに役立つものとなっている。

次に統合場の見地から、西洋と東洋の代表的世界観の幾つかを概説する。

物質一元論（唯物論）

世界は「物質」のみによって構成されると仮定する理論である。物質場のみが焦点が合わされ、それが強く実体化されている。近代の科学はこの唯物論を前提とする。そこにおいて形而上学的原理は完全に破棄されている。一切の現象は、実体化された物質存在（モノ）や物質にはたらく力として理解され、モノと力に関する合理的秩序性が徹底して求められる。

徹底した唯物論は、意識場を無視もしくは排除している。また、意識場をある程度考慮する唯物論は、意識場を実体化された物質場の存在カテゴリーに無理矢理ねじ込もうとする（意識の自然化）。しかしながら実際のところ、そのような取り組みは、哲学的には難しい問題（ハード・プロブレム）と化している。ただし、「実体化された物質場」と「意識場」の二つの機能的な相関関係を精査することは、比較的やさしい問題（イージー・プロブレム）である。

心身二元論

世界は「物質」と「精神」の二つによって構成されると仮定する理論である。物質場と意識場の両方に焦点が合わされ、それらが強く実体化されている。デカルトに代表される西洋哲学の二元論は、強力な思考作用によって意識の場を「思考する魂」にまで収縮して実体化する。また、物質の場を、思考対象として、数学的・論理的対象物として実体化する。この西洋的の二元論は形而上学的原理を「神」と呼ぶ。神を前提とする二元論では、神こそが究極的な意味での実体であり、物質と思考者（魂）は神によって創造された二次的な実体である。

西洋的な二元論の思想においては、「物質」「思考者（魂）」「神」の存在カテゴリーは明瞭に分離独立しており、このうち「物質」と「思考者（魂）」の二項目が対立存在となっている。これに対して、近代の唯物論（物質一元論）は、「神」と「魂」の存在カテゴリーを破棄し、「物質」にしか実在性を認めていない。

東洋的一元論

インドの梵我一如の思想、あるいは大乘仏教の形而上学的思想などがこれに相当する。意識場（個人存在）と統合場（形而上学的原理）の関係性に焦点が合わされる。唯物論のように、物質場が実体化されて一切の基準となることはない。

実践的には、個人存在の本質を知ることによって、一切現象の本質を知ろうとする。西洋哲学のように個人存在の本質を「思考」であるとはみなさない。むしろ思考を離れたところで、それ（自己の本質）を捉えようとする。

東洋的二元論

インドのサーンキヤ哲学が相当する。ヨーガの実践では、あらゆる「知られるもの」の活動を抑制し、その背後にある不変の本質（知る者）を探究しようとする。ヨーガは「生滅変化する意識内容（知られるもの）」と「意識場そのもの（知る者）」を、明瞭に区別して自覚することを目指す。

この意識経験における心理学上の二分化は、形而上学的概念の二分化へと発展する。サーンキヤ哲学では、不変の本質（知る者）と生滅変化する知られるものの活動は、それぞれ別個の形而上学的要素（プルシャとプラクリティ）として語られる。

無記

仏教は基本的には形而上学的原理に対しては沈黙を守る。また、モノ（物質場）を実体化することはなく、精神（意識場）を実体化することもない。不毛な哲学的議論を避け、現実をあるがままに気づくことを促し、真理へと至る「道」を説く。